全訳 封神演義《1》・目次

人物紹介図絵 vi
封神演義　主要地図 x
プロローグ 11

《全訳 封神演義 本編》

第一回　紂王、女媧宮に参拝す 18
第二回　冀州侯蘇護、商にそむく 32
第三回　姫昌囲みを解き、妲己を宮に進めしむ 59
第四回　恩州の宿に狐狸、妲己を殺せしこと 83
第五回　雲中子、剣を進めて妖怪を除かんとす 96

SAMPLE

第六回　紂王、無道にも炮烙を造る　112
第七回　費仲、計略にて姜皇后を廃す　132
第八回　方弼・方相、朝歌にそむく　156
第九回　商容、九間殿において節に死す　188
第十回　姫伯、燕山にて雷震を収む　206
第十一回　羑里城に西伯侯、囚わる　225
第十二回　陳塘関に哪吒、出世す　253
第十三回　太乙真人、石磯を収む　274
第十四回　哪吒、蓮花の化身を現す　293
第十五回　崑崙山の子牙、下山す　318
第十六回　子牙、火もて琵琶精を焼く　336
第十七回　蘇妲己、蠆盆をつくる　359
第十八回　子牙、主を諫めて磻渓に隠る　375
第十九回　伯邑考、貢ぎ物を進めて贖罪す　398
第二十回　散宜生、ひそかに費仲・尤渾に通ず　420
第二十一回　文王、誇官して五関を逃げる　442
第二十二回　西伯侯文王、子を吐く　455
第二十三回　文王、夜に飛熊の兆しを夢みる　473
第二十四回　渭水に文王、子牙を聘す　491
第二十五回　蘇妲己、妖を招き宴に赴く　516
コラム　～『封神演義』について～　533
『封神演義』年表　546
訳者略歴一覧　549

SAMPLE

【凡例】

＊本書は、底本に国立公文書館内閣文庫蔵鍾伯敬批評『封神演義』を用いた。底本の誤字脱字・地名・人名・数字・表記等の混乱は、その整合性に鑑みて適度に修正を加え、流布本などを参考に現代語訳を行った。

＊作中に示される詩や賦などの韻文については、意訳を施しており、訓読ではない。難解な表現については、字句そのものを改変している場合がある。

＊作中では殷の時代にそぐわない事物や描写が多々あるが、これは改変していない。たとえば殷の時代には皇帝の位はなく、紂王に対して「陛下」などの呼称は行われていないはずであるが、作中の表現はそのままとした。

＊『史記』などの史書と矛盾する箇所については、一部（ ）内にて注記することとした。

＊登場人物や地名の読みに関しては、原則的に漢音を優先させているが、慣用音が流通している場合はそちらに従った（申公豹（しんこうひょう）など）。また仏教に由来する人物や事物に関しては、原則として呉音を使用するが、一部の人物は、呉音と漢音の混在する表記となっている（燃灯道人（ねんとうどうじん）など）。

全訳　封神演義《1》

SAMPLE

人物紹介図絵　『繍像封神演義』（中華民国九年本より）

○人物解説

【殷】

紂王（ちゅうおう）――殷（商）の天子。
女媧廟に淫らな詩を書き残し、女媧の怒りを買う。

蘇妲己（そだっき）――蘇護の娘。紂王の妃となる。
正体は千年狐狸精。

姜皇后（きょうこうごう）――紂王の正妃。姜楚桓の娘。
妲己に濡れ衣を着せられ、憤死する。

殷郊（いんこう）――紂王と姜皇后の長子。
姜皇后を陥れた姜環を斬ってしまう。

殷洪（いんこう）――紂王と姜皇后の次子。
宮殿から兄と共に逃亡する。

黄貴妃（こうきひ）――紂王の貴妃。黄飛虎の妹。

楊貴妃（ようきひ）――紂王の貴妃。

商容（しょうよう）――殿の宰相。石柱に叩頭し自害。

比干（ひかん）――殷の亜相。

黄飛虎（こうひこ）――殷の武成王。黄貴妃の兄。

微子（びし）――紂王の伯父。

箕子（きし）――紂王の叔父。

費仲（ひちゅう）――殷の中諫大夫。奸臣。

尤渾（ゆうこん）――殷の中諫大夫。奸臣。

姜桓楚（きょうかんそ）――東伯侯。姜皇后の父。

姜文煥（きょうぶんかん）――姜桓楚の長子。姜皇后の弟。

崇侯虎（すうこうこ）――北伯侯。崇黒虎の兄。

崇応彪（すうおうひょう）――崇侯虎の長子。崇黒虎の甥。

崇黒虎（すうこくこ）――曹州侯。崇侯虎の弟。

鄂崇禹（がくすうう）――南伯侯。

蘇護（そご）――冀州侯。妲己の父。

李靖（りせい）――陳塘関の総兵官。托塔天王。
度厄真人の弟子。金吒・木吒・哪吒の父。

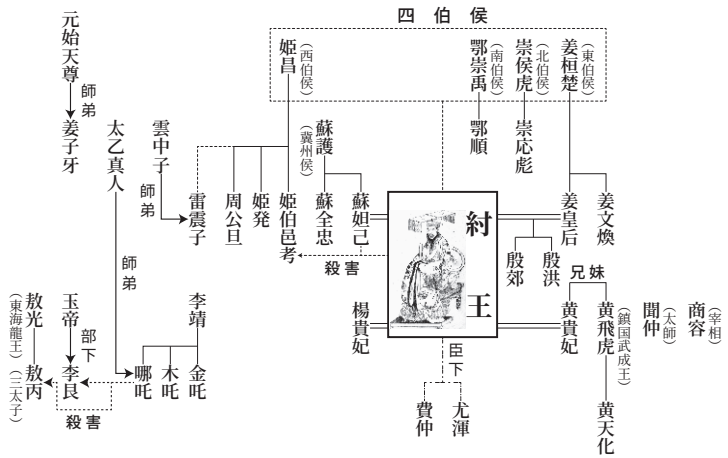
金吒（きんた）――李靖の長男。文殊広法天尊の弟子。

木吒（もくた）――李靖の次男。普賢真人の弟子。

哪吒（なた）――李靖の三男。太乙真人の弟子。

SAMPLE

『全訳　封神演義』第一巻　人物関係図



【周】

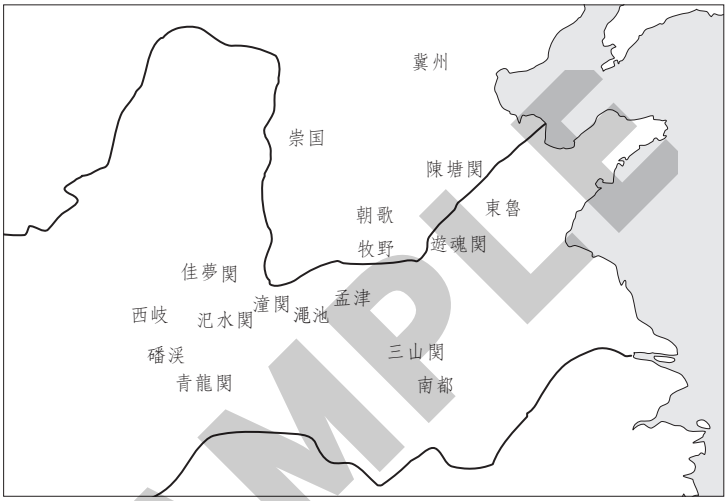
姬昌（きしょう）――西伯侯。周の文王。
太姒（たいじ）――姬昌の后。
伯邑考（はくゆうこう）――姬昌の長子。
姬発（きはつ）――姬昌の次子。周の武王。
周公旦（しゅうこうたん）――姬発の弟。周の四賢。
雷震子（らいしんし）――姬昌の子。雲中子に預ける。
散宜生（さんぎせい）――周の上大夫。
南宮适（なんきゅうかつ）――周の大将軍。
姜子牙（きょうしが）――太公望。元始天尊の弟子。
武吉（ぶきつ）――姜子牙の弟子。

【仙界と妖怪たち】

女媧（じょか）――上古の神女。
元始天尊（げんしてんそん）――崑崙山玉虚宮の主。闡教教主。
雲中子（うんちゅうし）――終南山玉柱洞洞主。雷震子を引き取る。
赤精子（せきせいし）――太華山雲霄洞洞主。
広成子（こうせいし）――九仙山桃源洞洞主。
太乙真人（たいいつしんじん）――乾元山金光洞洞主。哪吒の師。
普賢真人（ふげんしんじん）――九宮山白鶴洞洞主。
燃灯道人（ねんとうどうじん）――霊鷲山元覚洞洞主。
文殊広法天尊（もんじゅこうほうてんそん）――五龍山雲霄洞洞主。
清虚道徳真君（せいきょどうとくしんくん）――青峰山紫陽洞洞主。
敖光（ごうこう）――東海龍王。水晶宮に住む。
石磯娘娘（せっきじょうじょう）――骷髏山白骨洞洞主。

SAMPLE

封神演義　主要地図



※作中の地理は殷･周期の史実と合わず、またたがいに矛盾するところもあり、当図はあくまで便宜的に概略を示したものである。

SAMPLE

プロローグ

はるかな昔、多くの民族の歴史はまず神話からはじまる。日本でも、古代より以前は、神々の物語がずっと描かれ、かなりのちになって人間の世となる。

長い長い中国の歴史のなかでも、はじまりはまず神々の物語である。そして、いくつかの神話は、並存しながら長い間語り継がれてきた。

ところが、ずっと後世の明の時代も終わりになって、突如として「新しい神話」が誕生する。それが、「神々を封ずる」物語、すなわち『封神演義』である。

この新しい神話は、どんどん人々の間で有名になっていき、そしてそれまであった多くの神話を塗り替えてしまうほどになった。いま中国のみならず、東南アジアを含む多くの中華系の人々の間では、この「新しい神話」こそが「標準的な神話」となっているのだ。

とはいえ、『封神演義』自体が、そもそもそれまでの神話や物語を統合し、アレンジしてできたものである。

『封神演義』の舞台は、紀元前十一世紀の中国である。そのときは、商の王朝が亡んで、周の王朝が起こった時期にあたる。

まず「天地開闢」があり、それから「三皇五帝」の時代があり、そして「夏・商・周」の三つの王朝が続

SAMPLE

く。このうち、商王朝は殷王朝とも呼ばれる。周王朝はずっと続くが、途中から王室が弱くなり、春秋時代になり、さらに群雄割拠の戦国時代を経て、秦の始皇帝の天下統一を迎える。秦のあとは漢になり、漢が滅びると『三国志』で有名な三国時代となる。

古代神話によれば、天地はそもそもわかれていなかった。そこに登場したのが盤古という巨人で、この巨人が発達したことにより、天地は分離されたとする。

伏羲図

そして続いて、三皇の時代が来る。三皇は、ある書物では伏羲・女媧・神農であり、あるときは燧人が入る。また天皇・地皇・人皇を三皇とする場合もある。

人類を造ったのは女媧である。女媧は泥をこねて、人間を造った。ていねいに作った人は賢く、雑に作られた者は愚かとなったという。そして地上には人類が発展していく。

天地が崩れそうになったとき、女媧神は五色の石を練り上げ、たいそう苦心して天地を補修したとされる。慈悲に満ちた女神である。伏羲は人類に文化をもたらした。易の八卦を作ったのは伏羲とされる。伏羲も女媧も、上半身が人間で、下半身は蛇の姿をしている。いずれも神とすべきものであろう。

伏羲のあとは神農であるとされる。神農も、牛の頭に人の体であったり、人の姿をしていても頭にツノが生えていたりする。これも神話の人物である。神農は人々に農業を教えた。また様々な薬草を自分の身

で試したとする。そうして、医薬を人々にもたらした。

中華の世界では、りっぱな王は同時に聖人であり、そして文化をもたらすものなのである。このほかにも、燧人は人々に火をもたらし、有巣は家を作ることを教えたとされる。

次に、五帝の時代が来る。五帝も書物によってメンバーが異なっているが、だいたい筆頭に来るのは黄帝である。

黄帝になると、ほぼ人間の帝王の姿となる。黄帝の時代に、文字や音楽が定められ、政治が整えられ、衣冠の制度も定まったという。車を使うようになったのも、黄帝の時代からという。人類がようやく、文明らしい暮らしを始めたのがこの時代なのである。

ただ、黄帝のときに蚩尤という怪物が現れて、世界を大きく乱した。風后は黄帝の師となり、軍師として活躍し、蚩尤を討伐したという。風后はまた様々なものを発明した。

黄帝のあとは、顓頊・帝嚳・堯・舜と受け継がれていく。すなわち五帝の世である。五帝の数え方もまちまちで、少昊を五帝のうちに含める説もある。

そして有名な堯と舜の時代が来る。いずれも天下太平で、理想的な政治が行われたとする。『封神演義』でも、しばしば堯と舜の時代を引き合いに出す。これは中華世界のみならず、日本でもそうで、ずっと「堯舜の時代」と称され、賞賛されていた。この時代になると、その伝説も神話からだいぶ離れてくる。

しかし堯舜の時代、一方では中国では洪水が起きて、人々を苦しめたとされる。そのときに洪水を治めたのが禹である。

SAMPLE

舜は禹に位を譲り、今度は禹が王となった。しかし、禹が亡くなったあと、禹の子の啓が王となった。ここからは禹の子孫に代々王位が受け継がれることになった。これが夏王朝である。夏王朝が実在したかどうかは、論争があって定まっていない。夏王朝は五百年近く続いたという説がある。

夏王朝の末になると、桀王という君主が登場した。のちの紂王と並んで暴君とされる王である。桀王は政務を怠り、ぜいたくな生活をし、妹喜という美女を寵愛したが、反乱を招き、商の湯王に滅ぼされた。湯王はまた成湯と呼ばれる。ここからは、『封神演義』の冒頭部分にも書かれる通りとなる。

商王朝は実在の王朝である。殷王朝と呼ぶほうが日本では多い。商の最後の王である紂王が周の武王に討伐される話は、『封神演義』に書かれる通りとなる。

ただ、『史記』などの資料に記されるところによれば、それは『封神演義』の話とかなり異なっている。『封神演義』では紂王は英明な君主であったのが、狐の妖怪である妲己にたぶらかされて愚かな王（昏君）に変じたのであるとされる。歴史的な資料では、そもそも紂王は能力はあるものの、当初から暴君であり、また妲己も狐の妖怪などではない。

周の文王が羑里に囚われて、そこから脱し、のちに太公望呂尚（姜子牙）を得て、周の国は発展した。文王が亡くなって武王が継ぎ、商を討伐する。これは『封神演義』のみならず、多くの書物が伝えるところである。しかし、他の書物では周の戦いは「牧野の戦い」くらいが大きな戦で、あとはそれほどでもない。しかも、ほぼ商の側の自滅に近い。『封神演義』のように、苦労して五関を突破するなどの話は見られない。また当時は、戦車を使って戦うのが普通であって、騎馬の将軍が一騎打ちで戦うといったことはない。またこのころは青銅の武器ばかりで、鉄の武具はほとんど使われない。

さらに『封神演義』では、文王も武王もやや頼りない人物に描かれるが、『史記』などに見られる姿は、りっぱな聖王である。また太公望呂尚も、『封神演義』とはずいぶんと異なった人物像となっている。

『封神演義』よりのちの話であるが、武王は紂王を倒してのち、まだ若いうちに亡くなってしまう。子の成王があとを継ぐが、幼いため、武王の弟の周公旦が摂政として政治を行う。このときに、紂王の子である武庚を擁立して、やはり武王の弟である管叔鮮・蔡叔度などが反乱を起こす。この反乱を収めるため、周公旦はたいへんな苦労をする。その後は周の政治は安定し、長く続いていくが、やがて幽王のような暗愚な君が現れて、政治を乱していく。歴史は繰り返すのである。

商王朝については、二十世紀になってから考古学による発掘が進み、その跡地の殷墟（河南省安陽）から甲骨文などが発見され、多くのことがわかっている。

商王朝は宗教国家であった。王が祭司をつとめ、上帝などの神に祈り、そのお告げを占った。そして人間の犠牲を使って、神に捧げた。そのために奴隷や多くの捕虜などが生け贄として殺された。むろん、これはのちの儒教や道教とはかなり性格の異なる宗教である。

周王朝の時代には上帝よりも天を重んずる思想が強くなり、商のころとは宗教のあり方がだいぶ変わったようである。そして、その天の思想がのちに春秋時代になり、孔子の儒教の思想につながっていく。

『封神演義』には、道教や仏教が存在し、道士や僧侶が出てくるが、商の時代にはまだそういった宗教は現れていない。老子が実在の人物だったとしても、その活動は、はるかにあとの時代である。お釈迦さま

SAMPLE

三清図　[奥中央]元始天尊、[奥左]老子、[奥右]霊宝天尊(『三教捜神大全』より)

も、正確な年代は不明であるが、ずっとあとであるのは確かである。当然、この時期に仙人も仏もいない。

仏教はもともとインドの宗教であり、それが漢の時代に中国に流入した。その後仏教は中国の文化の一部となるほど浸透した。道教もこれに合わせて登場し、無為自然を旨とし、不老不死の仙人になることを目指す宗教として定着した。『封神演義』では、仙人も運命により殺し合いに加わるとするが、実際の道教ではそれはあり得ない。

『封神演義』の世界観では、先ほど挙げた女媧・伏羲・神農といった神々はすでに天界に移動しており、また一応、天帝(玉皇大帝)を中心とした神界も存在しているようである。この神々のメンバーが足りず、商と周の争いに乗じて大量に採用しようというのが、ある意味「封神」の主旨である。天帝は何をしているのか、あまり物語にはかかわらない。女媧神も、ほんらいの慈悲深い女神というより、怒りのあまり妖怪を召し出すなど、やや性格の異なった神となっているようである。

仙界はまた別に存在しており、元始天尊と老子(太上老君)が闡教を、それに通天教主が截教を主催する。そしてこの三者の師匠として鴻鈞道人がある。もっとも、元始天尊と老子は道教でも重要な存在である。

るが、通天教主や鴻鈞道人は、『封神演義』で創作された仙人である。『封神演義』のこのような天上界の構造は、ほかでは見られない。

それでも一応、元ネタは存在しており、道教では、商と周の争いのときに天界も地上も大いに乱れたので、玄天上帝という神が降り、そして秩序を取り戻したという神話を説く。『封神演義』は、この話を発展させたものである。

闡教と截教のほかには、西方教が存在し、これがすなわち仏教である。また燃灯道人(燃灯仏)や普賢真人(普賢菩薩)など、ほんらいは仏教に属する人物が、なぜか道教の仙人をつとめている。のちに仏教に改宗したという設定のようである。

こういった考え方は、『封神演義』独自のものである。つまり、古代の神話などをふまえながら、さらに道教や仏教、それに民間に発達した様々な物語を取り混ぜ、これを商と周の歴史物語にくっつけてしまったのだ。そして独自の新しい神話を作り上げたのである。ところが、この奇妙な「神々が戦う」物語はこの数百年間のあいだ中華の世界に広がり、いまや誰もが知る神話となってしまった。そして数多くの、もともと存在した神話を置き換えてしまうに至るのである。

奇妙だが、それでいて圧倒的に有名な、なんとも不思議な新しい神話。それが『封神演義』なのである。

SAMPLE